

ウェストミンスター寺院にある即位椅子は王となる 人が座る為だけのものではなく、由緒ある石塊が 収められる収納具でもあった

『ノートルダムの○●●男』のカジモドは「神」の「影武者」?

光藤俊夫

ヴィクトル・ユーゴー原作による『ノートルダム・ド・パリ』も、今までに何度も映画化されているが、最も(と言っていいかと思う)古いものでは1923年に封切られ、怪人俳優ロン・チャーニーが主演したサイレント時代のもの(ウォーレス・ウースリー監督)があり、最も有名なものには39年、モノクロームだが、性格俳優の誉れも高いチャールズ・ロートンのもの(ウィリアム・ディターレ監督)がある。またカラーでなら56年のアンソニー・クインとジーナ・ロロブリジダのフランス製(ジャン・ドラノア監督)と、最も新しいと言える86年、アンソニー・ホプキンスがカジモドになってのアメリカ製、コロンビア映画の『報われぬ愛の物語・ノートルダムの鐘つき男』(マイケル・タクナー監督)がある。— が何と言ってもロートンののが良かった。それと言うのも、少年時代に近所の三番館で観たそんな懐かしさが、今だにずっと残っているのこともあるのだが、この物語でのもう一人の主演であるジプシー娘、そのエスメラルダを演じていたモーリン・オハラが美しく、いっぺんに好きになってしまっていたからでもある。

後年それらを観直してみてもやっぱりロートンの演技が素晴らしく、それにひきかえ、フェリーニの『道』(1954)で評判を取っていながら、俳優稼業にまだ日が浅かったせいか、アンソニー・クインは芝居臭さが目立ち過ぎ、ロロブリジダもジプシー娘にはとても見えず、かと言ってロン・チャーニーのものは、ただただ“昔の語り草”以上のものではなかったし、ホプキンスのそれも、脇を固めたノートルダムの助祭長ドム・クロード役のデレク・ジャコビの名演技が印象的であったからこそ— といった調子で、どれも39年版を凌駕していないように思えたのだがどうだ

う。

しかし、ロートンのものの冒頭に、ルイ11世(位1461~83)統治下“百年戦争”後のノートルダム大聖堂を讃え、「信仰の象徴として国民の上に聳え立つアーチ、円柱、彫像は、石のページに歴史を刻み、祖国への賛美を表現した、まさに過去の偉大なる書物だ」とト書きに出ることで、この時あのグーテンベルク(1400?~68)以来の印刷技術も漸くにしてかたちを成してきたのだということも教えられるのだが、いずれも、ノートルダム大聖堂(1163~1245)はじめ、それが舞台となっている15世紀末のパリの様子を、極力忠実に再現してみせようとの努力は相当に払われていて、その限りではいろいろと参考になる場面が作り上げられているのに感心させられる。断るまでもなく、シテ島周辺の状況も現在の様子とは異なる。ノートルダム大聖堂前の広場からセヌ河はまったく望めないほど回りに家が建って混んでいて、だからこれはセットに違いないのだが、それらと実写を呼応させながらの、たとえば大聖堂の内部、ことにも鐘楼で鐘を突くカジモドのシーンなどで、それぞれに工夫が施されていて、当時の建築構造(ゴシック様式での尖頭アーチ=ポインテッド・アーチや飛梁=フライング・バットレス)などのいろいろの様子が観られるのも楽しい。それで、中世におけるロマネスク様式とゴシックのそれとはどこがどう違っていただろう?、またそれならルネサンスは? という、そんな詮索じみた気を起こさせるオマケもつく。ところでここに挙げた4本の映画の筋立ては、どれも原作に添って大要は同じだと言っていいのだが、しかし、それぞれに結末だけは違っているのが面白い。最初のものはジプシー娘が騎士と結ばれ、彼女への想いが捨



(映画『ノートルダム・ド・パリ』チャールズ・ロートン主演／1939年版』パンフレットより)

昔『ノートルダム・ド・パリ』は日本では『ノートルダムの〇〇〇男』と題されていた。— がその〇〇〇という言葉は今日では差別用語になっていて使用出来ない。そこで〇〇〇のところへ「鐘突き」と入れ、「鐘突き男」としたりした。

てられぬカジモドは鐘を突きながら死んで行く。次のはモーリン・オハラと乞食詩人が夫婦となり、みんなの祝福を受けながら去って行くのをロートンが寂しく鐘楼から見送る。3番目のはロロブリジダが乞食集団と皇帝兵士たちとの争いで流れ矢を受けて倒れ、クインはその軀に取り纏ったまま墓場にて絶命。そして4番目のは、助祭長を殺害、エスメラルダと、彼女が恋する青年を結ばせ逃がした後のホプキンスが、軍隊に追われるまま力尽きノートルダム大聖堂上から、ほとんど自殺に等しい身の投げ方で落下して死ぬ、とそんな具合だ。

さて、そこで『ノートルダム — 』で脇役ながら重要な位置で活躍している、拘り、かっぱらい、乞食などが集まったの“ならず者軍団”についてだが、パリならずとも、15世紀と言うのなら、未だ整備されていない、ヨーロッパのおよその都市で、彼らはいつでも徒党を組んで堂々と闊歩していたものらしい。

イギリスはヘンリー8世(位1509~47)の時代、と言っても、法廷のインテリアがいかにも、と当時の様子をよく伝えてくれていた映画『わが命つきるとも』(フレッド・ジンネマン監督/1966)で、離婚に反対されたからと言って今まで重用して来た宰相、しかも大法官であった、あの人文

主義者トーマス・モア(1477~1535)の首を撥ねてしまうといった暴挙を平然とやってのけたり、王宮の庭園が美しく撮られていたことと、当時の衣装の数々が華やかに舞っていたのが鮮やかな印象としてあり、アン王妃との愛の葛藤をいとも深刻に描き溜息つかせた映画『1000日のアン』(チャールズ・ジャロット監督/1969)で、世継ぎとしての男子が生めぬ女だとして、またしても王妃を斬首刑にしてしまったり、あるいは、またまたチャールズ・ロートン扮するヘンリー8世が本物そっくり、と言うのもドイツの画家ハンス・ホルバイン/子(1497~1543)の筆による肖像画と照合してのことだが、そのホルバインが、意外や小柄、しかも貧相な恰好で登場してくるのがオマケに観れる、これはイギリス映画『ヘンリー8世の私生活』(アリグザンダー・コルダ監督/1933)で、実にお茶目で放埒なわがまま振りを発揮していたりしている、そんな王の血気盛んな「時代」のことではなく、晩年の1547年、彼もまさに死の床に臥していたそんな時の話でのマーク・トウェイン原作「王子と乞食」にも実は“ならず者軍団”が登場していて、これがまた面白く奮迅するのだ。そしてその中の少年が、ふとしたことからヘンリー8世の嫡男エドワード王子と入れ代わってしまい、やがて王の死と同時に即位することになる結末でドンデン返しに至るまでの大騒ぎがチグハグだらけの展開で進行し、ユーモラスでありながら、ちょっとしたサスペンスも味わえる仕組みになっている。これが映画に仕立てられたのは1937年、ウィリアム・キーリーが監督しての『放浪の王子』だった。

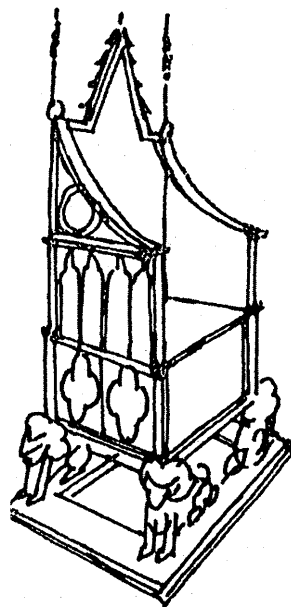
私が『放浪の王子』を映画館で観たのは小学生の頃だったと思うが、イギリスの歴代の王が戴冠式を行うウェストミンスター寺院って、何とデッカイお寺なんだろうと心底からびっくりしたことだった。もちろん映画ではセットであるに違いないが、本物を知らなかったし、よしんば知っていても、なるほどと思えるほどのゴシック様式で造り上げてあったそこで、エンドシーンとして観られる即位式で登場する“即位椅子=コロネーション・チェア”だが、これはこれで何と尖った背を持つ腰掛けだろう、といささか怪訝な面持ちで眺めたものだった。ごく最近にエドワード2世(位1307~27)を主人公に、拷問のシーンが痛々しく凄まじかったQueer(同性愛者)映画『エドワード二世』(デレク・ジャーマン監督/1991)があって、度々“即位椅子”は登場するのだが、王座ではあっても日常に王が使用出来



(映画『リチャード三世』のシーンより)

王が座っている中央に背が三角形に尖った装飾のある椅子が「即位椅子」である。

るものではないという意味で、多分に象徴的に扱っての仕業かと思う。なにしろあの座の下には、歴代スコットランドの王が戴冠の際に座した、俗に“ヤコブの石”あるいは“スクーンの石”と呼ばれている実に高貴な石塊が収められているのだから。これはときのイングランド王エドワード1世がスコットランドを制圧した際に持ち帰った、いわば戦利品なのだが、それをイングランドの“即位椅子”に収めることで、イングランド王はスコットランド王でもあることを喧伝しようとしての仕業かと思われる。(1996年、ブレア政権は700年ぶりにスクーンの石をスコットランドに返還、現在はエディンバラ城に保管されている。) そう、この椅子、もう1つ名を持っている。“セント・エドワードの椅子”だ。ついでのことながら、この椅子の脚下に備えられている4頭のライオン像は、最初には無かったものであり、さきのヘンリー8世が戴冠する1509年に追加されたものだと言う。だとするとリチャード3世(位1483~85)によってエドワード5世が幽閉される塔屋の場面が何とも陰険だった、ベルリン映画祭での銀熊賞映画『リチャード三世』(ローレンス・オリヴィエ監督/1955)で観られる、それが脚下の「ライオン像」も、まったく史実に悖るということになる。もっとも、ここでも“即位椅子”が登場する『放浪の王子』のリメイク物『王子と乞食』(リチャード・フライシャー監督/1977)では、物語そのものについてだが「あり得たことだとしても、史実ではない」と妙な断り書きが



「即位椅子」

(光藤俊夫著『世界の椅子絵典』彰国社1992より)

付いていた。

王子が乞食に、乞食が王子に擦り変わってしまったのは偶然のことからだった。そうではなく、敵を欺くために味方にも知らせず、計画的に替え玉を使って勝利した戦国の物語が、ちょうど「王子と乞食」と同じ時代に日本でもあった。脚本は井手雅人と監督の黒沢明の東宝映画、外国版プロデューサーとしてフランシス・ Coppolaとジョージ・ルーカスも加わって派手な、カンヌ国際映画祭グランプリの『影武者』(1980)だ。甲斐の国主武田信玄(1521~73・ヘンリー8世と同世代と言っていい)には、「もしも自分が死んでも、三年はそのことを敵に悟らせてはならぬ」との遺言があったそうだが、映画はそれを骨子としながら、生存中も常に“影武者”としての替え玉を何人か用意していたという史実にも則った上で、信玄病没後、信玄そっくりの顔かたちをした、しかし乞食同然の下郎を(賈の)信玄に仕立てて奮戦させる話だ。最初のうちはおどおどしながら、なかなかには殿様らしく振る舞えずいたのが、段々にその役が身につく、やがて本物と見紛うばかりの迫力を発揮し出すようになる仲代達矢の演技が見事だったが、騎馬合戦や火炎に包まれる城の場面などが美しく、いずれも臨場感溢れるカメラワークで唸らされる。オープン・セットであるにしろ、たとえば元小泉越後守の居城春日山城を、わざわざ兵庫県に石垣だけしか残っていない武田城跡などにしつらえていたりした、そのせいで迫力と言える。

ところで、信玄と越後の国主長尾景虎（後の上杉謙信・1530～78）とが竜虎相撃つ“川中島合戦”は有名で、これまた今日までに何度も映画化されている。それで謙信が敵方の信玄に塩を贈ったとか、謙信のひと太刀を信玄が軍配で受けたとか、講談もどきのエピソードは知っていたものの、一体この決戦、どちらが勝ってどちらが負けたのか詳らかでないのがもどかしい。もっとも、“川中島”は都合五回あって、二回目の時には今川義元の調停で和睦しているし、三回目では直接の対決はなく、五回目に至っては川を挟んで睨み合うだけだったのか合戦せず — と言った次第だから、謙信側としては越後侵略軍なる信玄勢を堰止めるだけで良く、ここで必ずしも雌雄を決することもなかった、とそう言えば言える。そして海音寺潮五郎原作の角川映画『天と地と』（角川春樹監督／1990）は“川中島”の四回目（永禄四年／1561）をクライマックスに置いた上で、実は上杉謙信の人となり華麗に描いた一大絵巻なのだが、カナダでのロケなど事前の宣伝が賑やかだったわりには、いささかまだるっこく退屈な筋運びだったように思う。もちろん、ここでも一体「どちらが勝ってどちらが負けたのか」、いよいよ判然としなないのだった。そこへいくと、同じ“角川”でも、現代の自衛隊員たちが“川中島”で信玄と闘う『戦国自衛隊』（斎藤光正監督／1979）の方が、変な話だが余程分かり易かった。

一個小隊の自衛隊が演習中にタイムスリップ、謙信×信玄の“川中島”が中心となる戦国時代に突入してしまう — とそんな話で、原作はSF作家半村良。現代人の心情をSFと時代劇をミックスして解析してみせようとした快作だ。千葉真一扮する小隊長伊庭義明はともかく、ここでも長尾景虎が主役だが、『天と地と』での優男とはうって変わっての無骨者として描かれているのが面白い。“川中島”にヘリコプターが躍り戦車が走る。轟く砲火と手榴弾が飛び交い、機関銃が火を吹く。かと思えば無数の旗指物がひらめき、限りなく放たれる槍と矢が空を覆い、百騎の馬が山河を駆ける。そして武田の本陣に殴り込んだ小隊長が信玄の首を打ち落とす。史実に従っての部分ほんの僅か、ほとんどは出鱈目であり嘘っぱちだ。しかし武田家滅亡を招く“長篠の戦い”（1575）での敗因が、織田信長×徳川家康連合軍による銃砲を使用しての近代戦法にあったことの、それがパロディと捉えるなら、まことその通りの実態感があり、上杉側に味方した自衛隊員たちが、どうし

てその謙信の手によって打ち果たされることになるのかという、浅い読みでの怪訝さを除けば、最後までまったく違和感なく楽しめた。それにここでの春日山城は、重要文化財指定の福井県丸岡城をそっくりそのまま借用していて、おかげで滅多に観られない国宝級の建造物の内外が、ちらりとではあれ垣間観れるのが結構なサービスだ。

そう、タイムスリップと言えば、その古典的名画、H. G. ウェルズの『タイム・マシン』（ジョージ・パル監督／1959）がある。それは“タイム・マシン”を発明した一人の青年科学者（ロッド・テイラー）の物語だが、1889年の大晦日、いよいよ実際に作動させてみるシーンが軸になって展開する愉快なあれこれが、大いに楽しめる仕組みになっている。たとえば近未来へのスリップを試みる過程で、インジケーターを先へ先へと進めて行く都度、研究室の窓から見える向かいのブティックのショウ・ウィンドウでのファッションが、段々に新しくモダンに更新されていくのが、何ともあどけなかったり、そのうちに何万年、何十万年もの未来に到達してしまったら、なんとそこはひとかけらの文明さえ退化し果てた原始社会、そして人間は目に見えぬ“神の声”だけに操られていて、まったくの奴隷と化していた — という実にシニカルな描写もある。ちなみに後年に作られた未来映画『猿の惑星』（フランクリン・J・シャフナー監督／1968）での2000年後の世界でも、人間は“猿”の「奴隷」という具合だったが、これはまさしく『タイム・マシン』が範となっていたのことに思う。

（みつふじ としお 生活機構研究科生活機構学専攻）